観想考

異業種分野交流会で学ぶ・・・・板谷光男

「青は藍より出でて藍よりも青し」・・と言う諺がありますが、私が代表を務める異業種分野グループのメンバーであったＡ君はまさに、その言葉にふさわしい逸材人物です。

Ａ君とは小学校の同級生で、現在は読売書法会の理事を務め、日展にも数多く入選しています。

また修験行者でもあり、昨年の秋、Ａ君と私を含む４人で埼玉県入間郡毛呂山にある宿谷の瀧に瀧行に行ってきました。写真は落差１２ｍの瀧です。

瀧行の３日前から肉・魚を食べられません。また同様に自宅のシャワーで瀧の水温に慣れる様に準備を進めます。昔から修験行者が悟りを開く為に瀧行が行なわれていたと伝えられています。瀧の真下に行くと、ざばっと物凄い音に様変わりする。勿論、水の圧力もすざまじい。午後７時頃とはいっても辺りは山や木に囲まれて真っ暗闇です。懐中電灯だけが頼りで、電池が切れたら最悪の状態になります。Ａ君は１人で瀧行に行った際、瀧行の最中、懐中電灯の電池が切れて、手探りで山道を下り、誤って道を間違い、岩から滑り落ちそうになったとか。滑落したら落差はなくとも命を落とす事もあるかも知れません。昼間に来れば大したことはありませんが、夜は危険です。次は火渡りの修行に誘われていますが、如何に心頭を滅却しても理論上、火傷するに決まっているという思いで、遠慮しています。

３か月に一度くらいＡ君とは親睦をはかっていますが、とにかく物知りである。単に博学なのか、それとも哲学者というべきなのか、何かで迷った時、彼の意見を聞く為に、居酒屋で彼と話し合う。と言うよりも一方的に彼の論客ぶりが披露される。同じ小学校で学んだが、当時の先生をはるかに超えている。

異業種分野グループのメンバーは他に歯科医、画家、実業家、大学の教員と様々ですが、建築一筋できた私にとって、実に新鮮な交流の場です。私は来年の１月で還暦を迎えますが、５０代の半ばを過ぎたころから、第２の人生を視野に入れ、いろいろな活動に取り組んでみようと、今までの消極的思考からポジティブな考え方に変わってきました。既に退任しましたが、大学の校友会では、いろいろな方と知り合い、そして学ばせて頂きました。

これからも、いろいろな方から経験したことのない事を学ばせて頂きたいと思っております。

遷都 1300 年祭の奈良に思う・・・・加納英範

旅に良く出かけているとの話題から、知人から幾度か奈良の魅力について聞かされていました。京都へは、仕事の合間に度々立ち寄るなどして、御朱印帳１冊が埋まるまでになっていましたが、奈良へは交通の便があまり良くない事もあり、足が遠のいていました。そこで、平城京遷都 1300 年の今年、妻と二泊三日の奈良自由旅行に出かける事となりました。

まず始めに、中学の修学旅行の際に印象に残っていた、腰を少しひねった妙齢なお姿をした月光・日光菩薩像と荘厳な趣を感じさせる三重塔がある薬師寺を参拝しました。47 年前の鄙びたお寺の面影とは異なり、高田好胤師による写経勧進のおかげで、金堂・西塔などの伽藍が見事に復興されており、まさに観光名所と化していました。又、遷都 1300 年祭の平城京旧跡会場でも 100 億円の費用を懸けた木材によって再興されたという、これも煌びやかに装飾された大極殿。その他にも、通年開帳していない寺が何年ぶりかで拝観可能に。極めつけは、奈良時代の創建以来初めて認められたという、唐招提寺金堂の１日限りの一般入堂。文化財の保存・復興には莫大な費用を要する事はわかっていても、これでもかと、この期を逃さずの資金集めの形相のように感じ、少々戸惑うばかりでした。

それでも、国立博物館で催されていた「正倉院展」では、目の前で見られた現存する最古の「五弦の琵琶」には、随分長く待ったにも関わらず、感動を覚えるものでした。又、新薬師寺は、崩れかけた土塀が続く古い家並みの中にひっそりと佇んでおり、薄暗い本堂の中に入ると、薬師如来を鎮守するどれもバランスのとれた十二神将達のお姿にお会いでき、静寂な中の力強さに感動し、奈良へ来た風情を充分味わうことも出来ました。

今回も、私の「折角来たのだから、あれもこれも見たい」病が出て、毎日 25,000 歩を超える強行軍となってしまいましたが、妻も奈良人の温かみやたくさんの美しい仏像に感動し、次は「二月堂のお水取り」にと計画案も出ています。寺も仏像も創建当初は、現在の中国や韓国と同様に鮮やかな色彩に包まれていたとの事ですが、齢月を懸けて造り上げられた「侘び・寂び」を感じる日本的な神社仏閣には、再び訪れたいとの思いを抱かせた旅となりました。